DREAM AND HOPE 2024

いま中学生が
訴えたいこと

夢と希望と

令和６年度　少年の主張愛知県大会 発表文集

主催／愛知県、愛知県青少年育成県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構
共催／愛知県教育委員会、新城市、新城市教育委員会
後援／名古屋市教育委員会、愛知県私学協会

はじめに

少年の主張愛知県大会は、中学校、義務教育学校、特別支援学校中学部及び各種学校に在学する生徒が、日頃の生活を通じて考えていることや実践していることなどを、意見や提言にまとめて発表することにより、思考力・判断力・表現力を高め、自主性や社会性を培うとともに、県民の皆様に、青少年の健全育成に対する理解を深めてもらうことを目的として開催しています。

この大会は、国際児童年を記念して、1979年から始められたもので、本年度で46回目を迎えました。今回は、県内247の中学校から35,312名という多くの生徒の応募があり、その中から学校選考、地区ブロック審査を経て選ばれた代表者14名に、８月23日に新城地域文化広場で開催された県大会において、それぞれの主張を発表していただきました。

また、この大会で最優秀賞を受賞された村木新さん（西尾市立鶴城中学校３年）は、中部・近畿ブロック代表者の一人として選出され、11月24日に東京都の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された全国大会に出場し、審査委員会委員長賞を受賞されました。

県大会の開催にあたっては、県内の各学校、市町村教育委員会、審査委員、県教育委員会等、多くの方々の御協力とお力添えをいただきました。特に、開催地である新城市の皆様には、運営等について多大なる御協力をいただきました。また、新城市内の中学生５名に「共感！」ジュニア選考委員を務めていただくとともに、新城市立作手中学校和太鼓部によるアトラクションを披露していただきました。ここに改めて心から感謝申し上げます。

この度、この大会で発表された14 名の主張を取りまとめました。この冊子が、青少年育成関係者を始め、県民の多くの方々の参考となり、青少年健全育成の一助となることを願っています。

2025年１月

愛知県知事
大村　秀章

愛知県青少年育成県民会議会長
永井　淳

令和６年度少年の主張愛知県大会

開会式

主張発表

アトラクション

表彰式

ジュニア選考委員

「第46回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2024～」

　愛知県大会最優秀賞の村木新さん（西尾市立鶴城中学校３年）は、11月24日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）で開催された第46回少年の主張全国大会に出場し、審査委員会委員長賞を受賞しました。

目　次

大会発表者の作品

最優秀賞	「じゃない方」になって気づいたこと	村木　新（むらき　あらた）	西尾市立鶴城中学校３年	1
優秀賞	こどもまんなかの社会へ	神谷　瑠音（かみや　るおん）	岡崎市立六ツ美中学校３年	2
優秀賞 共感賞	戦争のない世界へ	安藤　咲希（あんどう　さき）	稲沢市立大里東中学校３年	3
優秀賞	知ってほしい私の世界、私の思い	牧野　一貴（まきの　かずき）	新城市立千郷中学校３年	4
優秀賞	「二つの小さな命と出会って」	落合　奏重（おちあい　そえ）	一宮市立北部中学校３年	5
奨励賞	笑顔溢れる海を目ざして	安藤　さくら（あんどう）	田原市立田原中学校３年	6
奨励賞	難しくて奥深い	飯島　ディスミ（いいじま）	豊川市立中部中学校３年	7
奨励賞	自分らしさ	木村　茅咲（きむら　ちさ）	碧南市立新川中学校３年	8
奨励賞	ふるさとの魅力、発掘	黒田　空蒼（くろだ　そら）	西尾市立佐久島しおさい学校３年	9
奨励賞	究極の二択？	竹内　結希（たけうち　ゆうき）	新城市立八名中学校２年	10
奨励賞	あの壁の向こうには	戸谷　桜大（とや　おうだい）	あま市立七宝北中学校３年	11
奨励賞	図書館ノススメ	美藤　かのん（びとう）	あま市立美和中学校３年	12
奨励賞	祭の継承	山田　和摩（やまだ　かずま）	あま市立甚目寺南中学校３年	13
奨励賞	幸せを届けるために	横目　芽里奈（よこめ　めりな）	豊田市立小原中学校３年	14

講　評 …… 15

募集及び審査の経過と結果 …… 16

＜参考＞

「第46回少年の主張全国大会　～わたしの主張 2024～」　内閣総理大臣賞受賞作品

「一隅を照らす」　ケイバージーバ

（宮城県）　栗原市立栗原南中学校３年 …… 23

大会発表者の作品

（原文のまま掲載しました。）

最優秀賞（愛知県知事賞）

「じゃない方」になって気づいたこと

西尾市立鶴城中学校　３年　村木　新

「新のお弁当、美味しそうだね」

部活動の試合や校外学習などがあると、弁当が必要になる。食事中、弁当をのぞいてきた友達にそう言われることが度々あった。その時、私は父の顔を思い浮かべ、少し誇らしい気持ちになり、感謝する。

父は弁当が必要だとわかると、数日前から

「おかずはどうしたらいいんだ」

と、頭を悩ませているが、当日になるといつも早起きして美味しい弁当を作ってくれる。皆さんは、弁当を作ってくれるお父さんと聞くと、どんなイメージを抱くだろう。

「男性なのに、料理ができてすごいな」

もしくは、

「なんでお母さんが作らないの」

と疑問に思う人もいるだろうか。その疑問が湧くのには、きっと父親には「仕事をしてお金を稼ぐ一家の大黒柱」とか、「家事は母親が中心で父親はあまり手を出さない」などのイメージがあるからだろう。私の父も、以前はそんな「世間一般の父親像」とそう違いはなく、はじめから料理をしていたわけではなかった。では、なぜ料理をするようになったのか。それは、必要に迫られたからだ。

私が小学六年生になってすぐの四月、母は病気で天国へと旅立った。残された家族で生きていくために、父は仕事と家事をこなし、私たち兄弟三人を育てている。いわゆる「シングルファザー」の一人だ。母の一件から、私たちは、世間にありふれたごく普通の家族から、普通「じゃない方」の家族へと、オセロがひっくり返るように一変したのだった。

世間一般で見れば、ひとり親世帯が少数派で、その中でも父子家庭は母子家庭より圧倒的に少ない。ひとり親になる理由は、離婚や死別などさまざまだ。それにもかかわらず母子家庭が多いのは、おそらく子育てをする上で母親の方がもともと関わりが深く、家事をしていたという理由からだろう。

日頃、私は家族を支える父の姿を見ている。そんな父に改めてシングルファザーでどんなことに困っているかを聞いてみると、

「ひとり親世帯に対する支援は、就労や所得に制限がある手当てなどに限られている。実際は経済面以外にも、家事や仕事中の子どもの世話、習い事の送迎など、助けを借りたいことはたくさんあるのに、そういった支援は少ないな」

と話してくれた。こうした背景には、同じひとり親でも、男性は女性と比べ経済的な変化が少なく、それほど困っていないと思われている点があるからかもしれない。

私も、自分が今の状況になって、初めて父子家庭について考えるようになった。もし家庭環境に何も変化が起きなかったのであれば、父子家庭について何も考えることはなく、不自由のない毎日を過ごしていたと思う。では今後、自分が当事者であるかないかにかかわらず、さまざまな社会問題に対し、どのように目を向けていけばよいのだろう。当事者ではないからと言って無関心でいたなら少数派にいる人々の思いは日の目を見ることなく、消えていってしまうだろう。自分の生きていく社会をそんな社会にしないため、二つのことを心がけたい。

一つ目は、無意識のうちに世間の常識と思い込んでいる見方や、多数派の意見を一方的に押し付けることのないようにすることだ。そのような「アンコンシャスバイアス」と言われる意識が、性別や年齢、家庭や社会での役割に働いている場面があるかもしれない。できる限り先入観をもたず、実態に目を向け相手の立場に立ってものごとを考えることができる想像力を養っていきたい。

二つ目は、たとえ自分が「じゃない方」の少数派になることがあっても、自分の意見を言うべき時にしっかりと言える、勇気をもった人間になりたいということだ。

このように、社会のさまざまな事象や立場に関心をもち、適切に自分の考えを主張していくことが、社会全体をよりよい方向へと変えていく力になると、私は信じている。

私は今日も父が献立を考え、父が作った料理を食べる。今はまだこれは一般的「じゃない方」と思われるかもしれない。しかしいつか、そうした少数派の立場の人たちも、少数派「じゃない方」の人たちも誰もが、住みやすい社会が来ることを願っている。

優秀賞（愛知県議会議長賞）

こどもまんなかの社会へ

岡崎市立六ツ美中学校　３年　神谷瑠音

今、日本の社会が変わりつつある。二〇二三年四月一日、こども家庭庁が発足した。これをニュースで知った僕は、どんな省庁で何をするのかとても気になっていた。それから家でも学校でも、時間を見つけてはこども家庭庁のホームページを見るようになった。ある日、「こども若者いけんぷらす」というページが増えていた。子供や若者の意見を国の政策に反映するという前例のない取り組みだった。僕はその取り組みに興味をもち、早速応募した。後日、さらに運営パートナーの応募ページを見つけた。「いけんぷらす」の運営を職員の方と共に行うものだった。やってみたい。その一心で応募理由や、やりたいことを作文にして提出し、担当者とも面接をした。それから一週間後、僕は運営パートナーになることができた。相談して決まった名称は、「みんなのパートナーぽんぱー」だ。ここには子供や若者と対等に寄り添い、ポンプのように意見をくみ上げていくという思いが込められている。名前どおり一生懸命頑張っていこうと決心した。

六月十八日、ぽんぱーの第一回ミーティングがこども家庭庁で行われた。緊張して席に着いた。大臣を囲んだ話し合い中、こんな言葉が聞こえてきた。

「これから、子供の居場所はすごく大切な場所になっていくと思う。」

その瞬間、脳裏にある疑問が浮かんだ。僕の住んでいる岡崎市ではどうだろうか。子供の居場所ってどこだろう。公園だろうか。でもそれは違う気がした。思いつく場所はなかった。それならば、町づくりにもっと子供や若者の意見を取り入れれば、よりよい岡崎市になっていくのではないか。そう思うようになった。

僕は、子供たちの新しい居場所を作ろうとすぐに行動を開始した。市役所や社会福祉協議会に電話をした。町内会の人に自分の計画を説明した。友達に手伝ってくれないかと声を掛けた。すると、予想以上の人が賛同してくれた。僕たちは、大人と中学生二十一名で構成する「ぱわふる」という団体を立ち上げた。月に一度会議を行い、イベントの企画や居場所の在り方について、それぞれの立場から意見を交わしてきた。話が進むにつれ、課題も山積した。こども食堂を開くための免許や保健所の許可は誰に頼むのか。お金の管理はどうするのか。場所はどこにどう確保するのか。それらをみんなで一つひとつ解決していき、とうとう僕たちは防災と遊びを融合させたイベントの開催を実現させた。子ども食堂としてカレーを提供し、居場所となるようレクリエーションを行った。イベントには、子供だけでなく、大人も大勢来てくれた。活動中、今でも忘れられないものを見た。カレーライスをおいしそうに食べる子供の笑顔だ。農家の方や慈善団体に食材の寄付を頼んだり、炊飯器を貸していただけるようお願いしたりと、努力を重ねてきた。その笑顔を見たとき自分はこのために頑張ってきたんだと実感した。用意したカードゲームで遊んでいた小学生が掛けてくれた言葉、

「今日、めっちゃ楽しいよ。毎日やってよ。僕絶対来るよ。」

これは今でも一番うれしかった言葉として心に残っている。

こども家庭庁からの居場所に関する指針や他のこども食堂の実績、論文などを読み、時には日を越し、夜を明かしたこともあった。いろいろなこども食堂を見学し、勉強会にも参加した。他の団体のイベントの手伝いもして、僕なりに沢山の努力をした。失敗や苦労の連続だった。でも、僕は常にみんなが笑顔になってほしいという願いをもって信念を貫いてきた。そんな中、イベントでもらった多くの笑顔や言葉たちは、今の自分の更なる目標への原動力となっている。

僕は誰かを笑顔にするために、一人でも多くの人が自分らしく寛げて楽しめる場所や、時間をもてるように、これからもこの活動を続けていきたいと思う。新しいこどもの居場所づくりがこれからの僕たちの暮らしに豊かさをもたらすと確信しているからだ。僕の目標は、こどもまんなかの社会だ。

優秀賞（新城市長賞）・共感賞

戦争のない世界へ

稲沢市立大里東中学校　３年　安藤咲希

第二次世界大戦では、日本人だけでも三百十万人もの尊い命が絶たれました。

「三百十万人」とてつもない人数ですが、消えた命はそんな人数では収まらないはずです。三百十万人の犠牲者がこれからつなげていくはずだった命のリレー、それらは全て戦争によって突然断ち切られてしまったのです。

命にはもちろん限りがあります。寿命も一人一人違いますが、与えられた命を精一杯生き抜く権利が私たちにはあるのです。当たり前すぎて私は今までそれを権利とも思わず生きてきました。「どこの学校に行こうか」「どんな仕事に就こうか」「素敵な人と出会えるかな」将来の自分を想像することは、とても楽しいことです。私の未来は私自身で決められるのです。

しかし戦争は、三百十万人もの未来を奪い去りました。自分自身で未来を選ぶことができなかった三百十万人の絶望はいかばかりでしょうか。

私は、先日、広島に二泊三日の家族旅行に行きました。厳島神社を観光したり、もみじ饅頭や、お好み焼きをおなか一杯食べたりと、とても楽しい旅行でした。しかし、この旅のもう一つの目的は、家族で戦争について学ぶというものでした。

一発の原子爆弾が、無差別に多くの命を奪い、生き残った人々の人生も変えてしまった一九四五年八月六日。その事実を知るために、私は広島平和記念資料館を訪れました。そこで目にした映像、耳にした言葉、その全てが今でも私の頭の中で何度も繰り返されます。

映像作品「ヒロシマ被爆者からの伝言」では、被爆者からのメッセージが流れました。初めて聞くことばかりなのにそれは私の心の中に染み入るように感じられ、映像や、被爆者の方が話した内容はもちろんのこと、話すスピードやイントネーションまでも、はっきり覚えています。それほどまでに、私にとって衝撃的な現実だったのだと思います。

本館に入ると、動画で見たものよりも、もっと残酷で、そして生々しい、展示物がたくさんありました。血で真っ赤に染まったセーラー服を身にまとった少女、ボロボロに垂れ下がった、真っ赤な皮膚の小さな男の子、もう動いてくれない赤ん坊に向かって、叫び続ける女性の姿。写真や遺物が伝える当時の記憶に、私は思わず目をそらしてしまいました。

私が目にしたものは、「一発の原子爆弾が引き起こした地獄」のほんの一部にすぎませんが、受け止めきれない思いが溢れて胸が苦しくなりました。

翌日行った呉市にある大和ミュージアムでは、特攻隊員が書いた遺書が展示されていました。もっと家族と一緒に生きたかった、もっと楽しみたかった、と記された手紙に、その方の無念を感じ、涙がこぼれそうになりました。今の高校生や、大学生ぐらいの年齢の人たちが、死ぬことが分かっているのに、国のためにと旅立つ決意をさせられたのです。

戦争は取り返しのつかない人間の大きな過ちです。戦争によって奪われたたくさんの未来と無念な思いを、今生きている私たちは決して忘れてはいけないのです。

今も続く、ロシア・ウクライナ戦争。戦争が始まる理由は様々あるのでしょう。しかし、命より大切なものはないのです。命以上に守るべきものなんてないのです。一人一人の命の尊さをみんな分かっているはずなのに、「戦争」となると一気に数の麻痺が起こる気がします。「死者〇万人」という途方のない犠牲者数も、ただの数字になってしまうのが本当に恐ろしいです。

私は、この戦争を終わらせる術を知りません。話し合いで終わらせることはできないのでしょうか。必ず勝敗を決めなくてはならないのでしょうか。戦争の愚かさをいくら学んでも、私にはなんの力もありません。尊い命がこれ以上失われないよう祈りながら、平和な世界を待つしかないのでしょうか。

広島の海は、太陽の光を反射して、キラキラと輝いていました。木々は風に吹かれて、カサカサと優しい音を奏でていました。約八十年前、巨大なキノコ雲の下、罪なき命を奪った原爆の痕跡は消え、平和な空気が漂っていました。ロシア・ウクライナ戦争が一日も早く終戦し、国民に平和な日常が訪れることを願っています。

優秀賞（愛知県教育委員会賞）

知ってほしい私の世界、私の思い

新城市立千郷（ちさと）中学校　３年　牧野一貴（まきのかずき）

僕の身体は、時々、僕のいうことを利かない。そうしたいわけではないのに、身体が勝手に動いてしまう。とても怖いと思いませんか。ですが、このような症状をもつ人が、僕だけでなく、世界中にいます。

皆さんはチック症というものを知っていますか。チック症というのは、まばたきや顔をしかめるような動きを、自分の意思に関係なく頻繁にしてしまう「運動チック」と、咳ばらいを繰り返したり、ハミングのようにフンフンと無意識に言ってしまったりするといった「音声チック」の二種類の症状がある病気です。四歳から十一歳の間に発症することが多く、通常であれば出現して一年以内に自然と治っていくそうです。しかし、中学生になっても、成人しても、治らないことがまれにあります。僕もその一人です。

僕は、無意識のうちに喉を何度も鳴らしてしまいます。無意識のうちに肩をぐるぐると回してしまいます。やりたくてやっているわけではないのに、ついつい首を振ったり、横を見たりしてしまいます。

この症状のせいで、先生に怒られたこともあります。話をしっかりと聞いているのに、首を振ったり、横を向いたりしてしまうので、

「ちゃんと話を聞きなさい。」

「どこを向いているんだ。」

と、たびたび言われました。自分にはどうしようもできないのに、治すことができないのに、そのことで怒られてしまう。ショックな気持ちで胸がいっぱいになりました。

しかし、これ以上につらいことが、この症状のせいで、

「かぜひいた？」

「大丈夫？落ち着いて。」

と、周りの同級生に言わせてしまうことです。心配をしてくれるのはうれしいけれど、きっと周りに気をつかわせてしまっていると思います。それが嫌です。あんまり心配しなくていいよと思うことだってあります。しかし、頻繁に首を振ったり、肩を回したりしていたら、周りの人は気にしてしまいます。自力で治すことができれば、周りに気をつかわせずに済むと思います。しかし、自分の力では治すことができません。だからこそ、どうしても心配されることに罪悪感を感じてしまいます。

それでも、ありがたいことに、僕の周りの人から、チック症をもつ僕に対して

「気持ち悪い。」

「変なの。」

といった、ばかにしたり、変な言葉をかけられたりすることはありませんでした。「チック症の」牧野一貴というレッテルを貼ることなく僕を理解しようとしてくれることがたまらなく嬉しいです。僕の周りの人は優しさに溢れています。そのおかげで、元気に学校へ行くこともできています。

しかし、高校生になったとき、僕のこの症状は理解してもらえるのでしょうか。チック症のせいでいじめの標的になったり、偏見をもたれたりして苦しむ学生が数多くいるように、僕もそういったことの標的に今後なってしまわないかと不安です。また、仕事を辞めざるを得なかった大人もいると聞いています。チック症に悩まされる子どもや大人が、世界には数多くいます。それに対し、チック症のことを知らない人は多いです。チック症のせいで変なことを言う、変なことをしてしまうこともあります。その姿だけを見て、「かわいそう」「変だ」というレッテルを貼らないでください。他の人と同じように接して、内面を見てほしいです。きっと、僕と同じような症状をもっている人もそう思っているはずです。

チック症以外にも、様々な「障がい」というものがあります。「障がい」がつらいと思っている人もいると思いますが、「障がいのせいで、その人自身や中身を見てもらえない、偏見をもたれてしまうこと」がつらいと思う人の方が多いと思います。僕は、どんな人でも、その人の内面を見ることを意識して生きていきます。世界を変えることは難しいですが、ほんの少しの僕の周りから、障がいをもつ人への意識を変えていきたいです。今回の主張はその一歩です。今よりも、みんなが住み心地の良い世の中を目指して。

優秀賞（愛知県青少年育成県民会議会長賞）

「二つの小さな命と出会って」

一宮市立北部中学校　３年　落合奏重

三年前、私の家に二つの小さな命がやってきました。チャイニーズハムスターのハシルとカジルです。オス特有の体つきのせいで、ペットショップに長く売れ残ってしまっていた子たちでした。

最初、二匹をどうしても家に連れて帰りたいと懇願したのは私のほうでした。このまま狭いゲージの中で、一生を終えさせたくはないと、必死に母に頼み込んで、ようやく家にお迎えすることができた子たちでした。でも、そんな私と母の立場は、すぐに入れかわることになりました。予想もしていなかった母の溺愛ぶり。飽きもせずに二匹の顔をながめては、満面の笑みを浮かべる毎日。次々に増えていくグッズに、リビングを占領する大きな遊び場。今まで見たこともないほどの母の幸せそうな顔に、お母さんはハムちゃんを愛しすぎてるよと、半ば呆れながらも、私もなんだか胸があたたまるような、心が満たされていくような、不思議な気持ちになったことを憶えています。命と向き合うということは、こんなにも愛しい時間を過ごすことなのかと、私が知った瞬間でもありました。

だけど、それとは反対に、テレビなどから、惨たらしい動物虐待のニュースが、よく聞こえてくるようになったのも、ちょうど同じ頃からでした。これは、私の意識が変わったせいなのかもしれません。

犬の大量遺棄事件や、麻酔なしでの帝王切開。劣悪な飼育環境におかれる動物たちの姿や、流通過程で失われる、年間数万もの命。まるで「使い捨てのモノ」かのような扱い、としか表現できない残酷な内容に、私は当初、それらを現実として受け止めることができませんでした。自分なりに事実を確かめたくて、関連する本を取り寄せたり、環境省の資料を調べたり、ネットの記事を読みあさったりもしました。けれど、調べれば調べるほど、さらに多くの凄惨な実態を知ることになるばかりで、私は、怒りなのか、悲しみなのか、よく分からない感情で、頭の中がぐちゃぐちゃになりました。

なぜこんなにも恐ろしいことが起こるのだろう。なぜもっと厳しく規制することができないのだろう。なぜ動物の命は尊重されないのだろう。数年の間、私は堂々巡りする疑問の中に、とらわれていたように思います。

そんな状況が変わったのは、つい最近のことでした。きっかけは、動物愛護事務所の所長さんと、直接お話をする機会をいただいたことです。殺処分などについて質問する中で、法律の改正や厳罰化といった、上からの変化ばかりを望む私に対して、所長さんは、人が本来持っているはずの「愛情をもって動物に接する気持ちを失わせない」ことこそが、ペットビジネスの闇や虐待をなくしていく、一番の近道だと考えていらっしゃるようでした。

私はハッとしました。辛い現場を目の当たりにして働いている方が、まだこんなにも人の心を信じられるものなのかという驚きとともに、ハシルとカジルに出会った日の思い出が、いっきに胸の中にあふれてきたからです。あたたかくて、愛しくて、幸せな気持ち。これだ、と思いました。確かに、誰もがはじめから、動物を傷つけようと意図しているわけではないはずです。かわいいと感じたり、しぜんと笑顔になれた時が、必ずどこかにあったはずです。もしその時の気持ちを、失うことなく育むことができたなら――。私は目の前に新しい道が広がっていくのを感じました。

動物と人を繋ぐ、かけ橋になりたい。保護された動物たちと触れ合ったり、それぞれの特性を学んでもらったり、慈しむ幸せを知ってもらったり。そんな「命と教育を結ぶ」仕事を私はしたい、そう思いました。もちろん法律も学ばなければならないし、想像以上に難しいことが、他にもたくさんあるかもしれません。でもいつか、日本が動物愛護先進国と呼ばれる日を迎えたなら、私は胸を張って空にいるハシルとカジルに、こう報告をしたいです。

ねえ、君たちとの出会いが、私に新しい道を歩く勇気をくれたよ。ありがとうね、と。

奨励賞

笑顔溢れる海を目ざして

田原市立田原中学校　３年　安藤　さくら

私が住む愛知県田原市。田原市と聞いて、皆さんは、何が思い浮かびますか。きっと田原市を知る多くの方が、きれいな海に囲まれた渥美半島や、自然豊かな町並みを、頭の中に浮かべてくださっていると思います。

ただ、私が今日ここで話したいのは、そんなふるさとの自慢ではなく、むしろふるさとが抱える課題と、その解決に向けた私の決心です。

さて、私たちの身の回りは、プラスチック製品であふれています。安価に生産でき、使い捨てできるという利便性から、多くの日用品に使用されています。

しかし、使い捨てできる便利さゆえに、海洋プラスチック問題を引き起こす原因となりました。ふだん私たちが使っているペットボトルなどのプラスチック製品がポイ捨てされ、海に流されることで海洋プラスチックになるのです。そして、海洋プラスチック問題は、海洋汚染や生態系の破壊を引き起こします。

私が、海洋プラスチック問題を知ったきっかけは、海に遊びに行ったときのことです。まず当たり前のように落ちている大量のゴミに驚きました。きれいな海が田原のシンボルです。海を守るために何かできることはないかと考えるまでに時間はかかりませんでした。すぐに海のゴミ拾いを始めました。

最初は家族と一緒にゴミ拾いをしていましたが、ゴミの量が多くて一度にたくさんのゴミを回収するのは難しいと感じました。

そこで私は、自分が所属する学校ボランティアグループ「たはランティア」の活動の一環として、海のゴミ拾いを計画し、全校に呼びかけました。集まってくれた二十五人のメンバーで海のゴミ拾いをしました。一時間で約六十キログラムのゴミを集めることができました。

参加してくれた人は、こんなにたくさんの種類のゴミが落ちているのは知らなかったと、驚きの声を上げていました。また、拾ったゴミの中には、製造日が二、三ヶ月前のものや、賞味期限がまだ切れていない、新しそうなものがあることに驚いている人も多くいました。

これらのことから、私は、海に行って実際に見る機会がないと海洋プラスチック問題を知るタイミングがなく、ポイ捨てとの関係を知っている人が少ないために、ポイ捨てがなくならないのではないかと考えました。

そして、海のゴミをなくすためには、この問題をたくさんの人に知ってもらう必要があると思いました。

二〇五〇年には海の魚の量より海洋ゴミの量の方が多くなると言われています。二〇五〇年と聞くと、まだまだ先の未来に思えませんか。でも、実際に海を眺めると、「もうすぐなんだ、怖いな」と感じます。

私は、海がゴミであふれる未来になってほしくありません。未来の海は、笑顔であふれてほしいと思っています。そのためにも、これから自分ができることを常に考えて行動していこうと心に決めています。

私は今、「海の運動会」を計画しています。ゴミ拾いリレーや、ゴミの借り物競争など、海でしかできない競技を考え、地域の方と一緒に海を楽しむ中で、海洋プラスチック問題について知ってもらうイベントです。

このように、田原市が抱える海洋プラスチック問題について考える経験は、私を成長させてくれるよい機会になっています。海のゴミ拾いを通して、人のために行動する大変さや難しさ、大切さを学びました。人の役に立つ楽しさや喜びも学びました。ここまで真剣に熱く考えることができたのは初めてです。

田原市は、都会的ではないですが、「海」という魅力があります。まだゴミが多いのが現状ですが、ゴミの落ちていない、きれいな海を目ざして活動していきたいです。

私は、海が好きです。海には人を癒す、自然の力があります。それをたくさんの人に感じてほしいです。そして海が癒しの場所、皆にとって必要不可欠な場所、たくさんの笑顔であふれる場所になりますように。

奨励賞

難しくて奥深い

豊川市立中部中学校　３年

飯島　ディスミ

皆さんは、日本語を難しいと感じたことはありますか。私はよく難しいと感じます。

例えば、「あつい」という言葉。どれくらいの意味を思い浮かべますか。私が知っている限りでは、寒い暑いの「暑い」、冷たい熱いの「熱い」、薄い厚いの「厚い」と、三つもあります。また、辞典で調べてみるとまだまだあります。このように、たとえ同じ発音だとしても意味が大きく違っている場合があります。

逆に「日本」の「日」という漢字、他に何と読みますか。「ひ・び・にち・じつ」と四つも読み方があります。さっきとは逆で、同じ漢字なのに、いろいろな場面での使い方によって、読み方が異なってきます。

さらに文字数では、世界で一番使われている中国語で約七千文字、二番目の英語でアルファベット二十六文字です。これに対して日本語は、ひらがな四十六文字、カタカナ四十六文字、漢字が七千二百三十四文字です。日本とネパールのハーフの私でも、ある程度書けるようになるまでに、かなり時間がかかったことを覚えています。

私の母はネパール人で、日本語の勉強を始めてから八年くらいたちましたが、やっぱり日本語は難しい、といつも言っています。私も日本に来て六年たちますが、いまだに言葉の行き違いで友達や父とぶつかることがあります。

だいぶ前の話になりますが、父とリビングにいたとき、父が「雲が出てきたな」と言いました。私は虫の方の蜘蛛だと思い、騒ぎながら近くにあった殺虫剤を手に取り振り回しました。すると父に「何やってるんだ、お前、人の話を最後まで聞け」と言われました。このように日本語は相手の考えていることや状況を見ながら聞かないと、全く違う意味に捉えてしまうことがあります。また、その反対で自分が何かを伝えるときも、丁寧に考えて言わなければ、勘違いが起こることもあります。

そして、日本語が難しいと思うもう一つの点は、日本語には曖昧な表現が多くあることです。例えば「今度、ごはん行こう。」と誘ったとします。すると相手に「大丈夫です」と返されました。さて、あなたはどう判断しますか。どんな表情で、どんなトーンで言っているかを考えなくてはなりません。このような曖昧な言葉は、イエスとノーがはっきりしていないため、理解するのが難しいです。そこで、私は、なぜ日本語には曖昧な表現があるのかについて調べてみました。すると、そこには、日本人が相手を不快にさせたくない、相手を傷つけたくない、という思いやりの心が詰まっている、ということが分かりました。そして、私は日本語の曖昧さは優しさだ、と思うようになりました。否定するような言葉でストレートに言うと、心にぐさっと刺さる場合があります。遠回りでノーと答えることができる日本語はとても面白いし、便利だと考えるようになりました。

日本語の面白さといえば、最近の若者言葉があります。例えば「はにゃ」です。この言葉は友達と会話をしているときに聞きました。これは、相手の発言が理解できないときやあえてとぼけるときに使う感動詞の一種だそうです。このような流行り言葉は理解するまでは難しいのですが、マスターしたら、短い言葉で効率よく情報を伝えることができ、コミュニケーションも取りやすくて便利で面白いと思います。

私にとって日本語は難しいです。ですが、日本語には日本語でしか表現できないことがたくさんあり、魅力があります。そして日本語はまだまだ奥が深く、学ぶことがたくさんあります。これからも私は日本語の勉強を続けていきます。

奨励賞

自分らしさ

碧南市立新川中学校　３年

木村茅咲

私には嫌いな言葉がある。それは「女だから」「女らしく」「女のくせに」である。

男と女のように、性質や状態を区分けすれば区別。男なのに、女のくせにと、差をつけて取り扱い、偏見や先入観をもとに不利益や不平等な扱いをすれば差別。区別と差別には、明確な基準がなく境界線も曖昧。だから、区別に終わらず差別に繋がり、個人の主観に左右されてしまう。その中で、こうあるべきと固定された考え方は窮屈であり、苦しい。

小さい頃の私は、外を走り回り飛び跳ねる活発な女の子だった。そんな私に祖父母は、

「女の子なんだから、もっとおとなしくしたら。」と言っては、絵本やおままごとを促した。

小学校の家庭訪問で、先生には

「仲のいい女の子もいるみたいだが、男の子と外で遊ぶ姿をよく見かけます。」

と心配された。男の子に囲まれて育ったからかなと苦笑いしながら、「そこが茅咲らしいでしょ。」と母は返す。

高学年になり、足が速い、遠くに跳べる、ボールを飛ばせる、強い球も受けられると、褒められることが増え、「体を思いっきり動かすのが好き」と、自分からも周囲に言えた。それでも心配する先生には、同じレベルで走ったり跳んだりできる女の子を見つけたり、自分を表現できる陸上クラブを探してきたと伝え、「この行動力が茅咲らしいでしょ。」と言ってくれる母の一言が、私は嬉しかった。

女の子だけで女の子っぽい遊びをしないといけないのかと思うこともあった。でも母の「茅咲らしいでしょ。」の一言、俊足を褒めてくれる先生がいて、周囲にどう思われても自分が好きな「自分らしい行動」を続けていれば伝わるんだと、私は思えるようになった。

それから私は、男とか女とかがない男女を繋ぐ人でいたいと思い、学級委員となり、男女の壁なく、一人ひとりが自分らしく居られるクラスであるよう行動するようになった。こうなると次は、「男みたい」と言われることが増えた。「男みたい」には、「女のくせに」が隠れているし、何かを決め、みんなを引っ張っていくのは男の役割だという考えもあった。なぜ女の子がやってはいけないのだろうか。

ジェンダーについて調べていくと、海外に比べ日本のジェンダー平等が進んでいないと分かる。男女格差を数値化したジェンダーギャップ指数では、一六五か国中で日本は一二〇位。驚きながらも、納得の順位だった。世の中の「女のくせに」は、なかなか減らない。男らしさ・女らしさは良い表現として使われるが、行動を男女で分けられるのは窮屈だ。男とか女とかではなく、その人ならではの行動であり個性として誰もが自分らしく振舞えたら素敵。

そう言いながらも、私にもある。クラスの決め事を進めるとき。こそこそ不満を言う女の子を見ながら、これだから女子はと思う。即決が気持ちいいと言ってくれる男の子に、男のサバサバ感が楽と思う。自分が理解されないと「女だから」と否定してみたり、自分に都合のいいことは「男だから」と肯定してみたり。差別は嫌だと言いながら、矛盾する自分の感情に気持ち悪さを覚えることもある。

なぜ、差別するような感情や言葉が出てしまうのだろうか。きっと自分と異なると、無意識のうちに差別してしまうのだろう。そう、自分と異なる生き方・考え方を理解し、認め、受け入れるのは難しく、容易ではない。十人十色の異なる部分を知ろうとする気持ちで、一つひとつを共感できる自分でありたいと思う。

区別と差別には、主観が影響するのであれば、選択できる自分の態度にも言葉にも責任をもちたい。私も、「あなたらしいね」と言ってあげられる人になりたい。そして、もし周りの人と自分が違っていても、素直に自分で自分を受け入れてあげよう。「あなたらしさ」を認め合いながら、「自分らしさ」も大切にしていきたいと思う。

奨励賞

ふるさとの魅力、発掘

西尾市立佐久島しおさい学校　3年　黒田空蒼

「佐久島」と聞いて、皆さんは何を思い浮かべるだろうか。アートの島、おいしい海の幸、豊かな自然が織りなす美しい風景。どれもが佐久島の魅力に違いない。五年前、佐久島しおさい学校に通い始めたときの僕も、そう感じていた。

でも、今、僕が佐久島で最も魅力を感じているものは、古墳だ。島内には、六世紀後半から七世紀頃にかけて作られた古墳がおよそ四十基余りある。全長十メートルを超える円墳や、群集墳といって、狭い場所に密集して作られた複数の古墳など、貴重な古墳が数多く残っている。しかし、あまり多くの人には知られていないのが現状だ。

僕が島の古墳に興味をもつようになったきっかけは、前期課程六年生のときに全校で取り組んだ古墳整備ボランティアだ。県内有数の群集墳の一つ、平古古墳群の整備を行った。例年、行っている行事だが、この年はちょうど西尾市による発掘調査と重なり、石室内の様子を直接見たり、学芸員さんから話を聞き、出土品を間近に見せてもらったりする機会に恵まれた。ぴったりと積み重ねられた石に囲まれ、奥へと深く続く薄暗い石室。未知なる千四百年前の世界と現代とがつながっているような、不思議な感覚に襲われた。出土した土器に手を触れると、一世紀以上前にも佐久島で暮らす人々がいて、その人たちの生活や生きた証が伝わってくるように感じられた。当時作られたものが長い年月を経て、今でも残っていることへの驚き。出土品や古墳の特徴から当時の島の人々の暮らしや、どのような人が埋葬されていたのかを推理するような面白さ。話を聞いているうちに、ぐっと古墳の魅力に惹きつけられた。

島の古墳のことを、もっと知りたい。この思いから、後期課程に進級した僕は、総合的な学習の時間「しおかぜ学習」での個人追究テーマを、迷わず「佐久島の古墳」に決めた。そこで、まずは島の古墳のことを知るために、古墳整備ボランティアのときに話をしてくださった西尾市の学芸員である浅岡さんや、ボランティアの中心になって活動してみえた島民の筒井さんと話をすることにした。浅岡さんからは、島の古墳の歴史的な価値や、西尾市として古墳をどのように保存し、その価値を伝えていきたいと考えているのかを教えていただいた。筒井さんと話した際には、島民として島の古墳をどのように整備し、守り継いでいきたいと考えているのか、その思いに触れることができた。「そこにただあるだけでは、無いのと同じ。価値や魅力を広く知ってもらう必要がある。」「平古古墳群がある所は、公園のような、ゆったりとした時間が流れる場所。そのよさを大切にしたい。」お二人の強い思いが胸に迫ってきた。そして、島の古墳のことをもっと知りたいという思いだけでなく、島の古墳のために、何かをしたいという思いが、僕の心の中にも生まれてきた。

そこで、二年生の「しおかぜ学習」では、平古古墳群に焦点をあて、その木々に囲まれ、広々とした空間を訪れた人がゆったりと過ごすとともに、古墳群の価値や魅力に少しでも触れられるようなアイディアを「平古古墳未来予想図」として、イラストにまとめた。島の竹を活用した手作りのベンチを置いて、古墳や風景を座ってゆったりと眺められるようにしたり、古墳名が書かれた看板の近くに、古墳の紹介や僕がボランティアのときに感じた魅力を言葉やイラストで表現したQRコードを作成し、設置したりしたいと考えた。他にも、島を訪れた人に平古古墳群へ足を運んでもらうための案内看板の作成など、実現したいことがあふれてきた。

今年度、三年生になり、「しおかぜ学習」も最後の一年となった。今は、実際に島の竹を活用したベンチ作りに取り組むなど、筒井さんや浅岡さんなどの協力を得ながら、「未来予想図」の実現に向けて活動を進めている。しかし、今年度の「しおかぜ学習」で古墳をテーマに活動しているのは、僕一人だけだ。僕が卒業したら、この活動が途絶えてしまうかもしれない。そうならないように、後輩をはじめ、より多くの人に島の古墳のこと、僕が活動していることを知ってもらいたい。そして、これから先もずっと大切に守り継がれていってほしい。ふるさと佐久島のために何ができるのかを考え、具現化していきたい。

奨励賞

究極の二択?

新城市立八名中学校　２年　竹内結希

私には自分の中にある絶対的な「主張」というものがない。「どちらがいいか」「何が正しいのか」と問われても、答えに辿り着くまで時間がかかってしまう。私はずっとこのことを直さなければ…と思ってきた。しかしあるとき気づいた。「答えを一つにしなくてもいいのでは？」ということに。与えられた選択肢にとらわれず、新しい発想をもつことで、今よりさらによい手段や答えが見つかるのではないかと…。

世の中は「二択」で溢れている。男か女か、陰キャか陽キャか…。まるでそのどちらかに無理やりねじこまれているように感じることはないだろうか。選択となると、どちらでもない人、あるいはどちらにも当てはまらない人などいないような空気が作られる。それによって何人もの人が「個性」を出すことができない状況におちいってしまう。それほどつらく理不尽なことはないだろう。

しかし最近、そう苦しんでいる人たちが、自分の個性を出せるような環境が作られつつある。

「ルッキズム」という言葉を知っているだろうか。それは簡単に言うと、「外見で人を判断する」ことだ。「やせていたほうがいい」「男性は背が高い方がいい」「○○らしく」などの言葉が周りを飛び交っている。悪意はなく、自然に口に出している場合がほとんどだろう。だが、その一言で過度なダイエットを始めて健康に害が及んだり、自分のことが嫌いになってしまったりすることさえある。「美人かブスか」というような偏見的な二択を一旦頭の隅に追いやり、その人の中身を見ることが何より重要だと私は思う。

私自身、それを強く感じた経験がある。以前、スイミングスクールから帰るとき、二人の女の子がこちらをちらちらと見てくるのに気づいた。何となく嫌な予感はしていた。気づいてないふりをして彼女たちの前を通り過ぎた。すると「背が小さい子って、自分のこと可愛いって思ってそ～」という何とも許し難い、意味不明な声が聞こえてきた。特にそれがコンプレックスでは無いが、好きでこの身長なわけではない。なぜそんな根拠もないことを他人に言われなきゃならないのか…。さすがにイラッとした。まさにルッキズムだ。

誰しも最初に目にするのは大抵外見だが、その後の行動から感じ取る「第二印象」こそが大切だと私は考える。どれだけ清潔感あふれる見た目の人でも、会話をだるそうに聞いていたり、態度が大きかったりすると印象は決してよいものにはならないだろう。「二択」になることで、本当に大切なものが見えなくなってしまうと思うと非常に怖い。

しかし、選択肢があることで、私たちが考え易くなり、一段と楽になることは間違いない。ただ、当たり前のように作られた選択肢の中に自分の考えがない場合、その縛りの外にまだまだ自由な考え方があるのだと気づけるかが重要だ。そのために、自分に有益な情報ばかりを集めてそれが正しいとうのみにせず、常日頃からたくさんの人の様々な意見に耳を傾けるべきだ。二択ではなく、もっといろいろな、一人一人の判断があってよいのだ。

「多様性の時代」と言われる今、少しずつ自分が新しい選択を生み出して納得のいく生活を歩む人たちも現れてきた。しかし、すべての人がそうできているかと問われれば、まだ道半ばだ。インターネットが普及し、あちこちでたくさんの「当たり前」が飛び交う今だからこそ、「当然」とされる選択に惑わされない力が必要となるだろう。そのために、普段から様々な視点から物事をとらえ、自分なりの答えを見つけ出すことが必要なのではないか。自ら選択肢を生み出すことで、求める理想により近づくことができるに違いない。

奨励賞

あの壁の向こうには

あま市立七宝北中学校　３年　戸谷桜大

「僕は男の人が好きです。」
と僕が言う。すると、僕の両親、友達、身の周りの人たちは、何と言うだろう。

はっきりと自覚が現れたのは中学二年の夏。僕は同級生の男子に惹かれた。初めは半信半疑だった。昔は女の人に魅力を感じたこともあったし、なにより自分を受け入れられなかったからだ。しかし、時間が経つにつれて、「自分は男の人が好きなんだ」という自覚は強くなっていった。その時から僕は、だんだん自分のことを嫌いになっていった。

中学二年の夏休みが明けても、誰かに相談したり、話したりすることはできなかった。もし話したら、人間関係に傷が付くと思い、怖かった。それなら自分が我慢する方がマシだと思っていたが、生き辛くなる一方だった。

孤独な気持ちを抱え込んだまま辛く苦しい時間だけが過ぎていった。いっそ、この気持ちを吐き出してしまいたいと思うようになった。そして、幼い頃からの友達に僕自身のことを全て話した。男の人を好きになったこと、それを誰にも話せていないこと。話している間も怖かったけれど、ありのままの事をひたすらに吐き出した。僕が話し終えてしばらくの間、沈黙が続いた。怖くて、気まずくて、逃げ出しそうな足を踏み留めて、彼からの言葉を待った。しばらくして、彼は一言だけ、
「そうだったんだね。」
と。僕の事を蔑んだり、逆に励ましたりすることはしなかった。けれど、僕はそれが嬉しくてたまらなかった。同性愛者としての僕が「普通」にいられるその瞬間が、とても美しく思えた。

それから僕は、自分自身について、同性愛者と呼ばれる人たちについて、もっと知りたくなった。男性を好きになる「ゲイ」、男性も女性も好きになる「バイセクシュアル」、同性愛者はおよそ十人に一人、左利きの人と同じくらいの割合でいると言われていることを知った。「僕はひとりぼっちじゃない」そう感じた。同時に、「僕のような人の存在を知ってもらいたい」と思った。それから、担任の先生、いつも一緒に練習している部活の後輩に、同性愛者であることを打ち明けた。二人とも驚いたり、僕を避けたりすることはなく、しっかりと聴いてくれた。担任だった先生は異動されてしまったけれど、中学二年の一年間、僕を気にかけ、とても親身に接してくれた。部活の後輩も、変わらずいつも一緒に練習してくれている。むしろ隠し事がなくなって、以前より気兼ねなく話せるようになった気がする。僕は周りの人たちのおかげで強くなれた。

もちろん、同性愛を快く思わない人もいる。学校生活の中でも、同性愛を否定する言葉はよく耳にする。それを聞いて僕は少し苦しいけれど、それも立派な彼らの主張だとも思う。この地球には、八十億を超える人間が生きているのだから。

「多様性」という言葉は、決して美しいだけではない。多様である社会を意識させると同時に、この世界には、自分が思いもしない人がいると自覚させられる言葉だと思う。本当に難しい。でも、そこで「自分」を見失ってしまうのは、いちばんよくないことだと思う。

LGBTQ＋を理解しようとする動きは、良いものだと思う。だが、それを全員に強いるのは、間違いだ。それは一種の差別だし、根本の解決には至らない。少しずつ、存在を知ってもらい、それが世の中に浸透していってほしいと思う。その役割が、僕自身にもあると思う。十人に一人いる同性愛者全員が胸を張って「わたしは同性愛者です」とためらわず言える世界が、僕の願いだ。けれど、一人では成し遂げることはできない。明るい未来には、「人が誰一人としてひとりぼっちにならない」ことが必要である。これが僕の主張だ。少なくとも僕はひとりぼっちじゃなかったから強くなれた。性指向など関係ない。誰もが等しく悩み、壁にぶつかる。しかしその壁に沿って歩くと、同じように悩んでいる人と出会う。手を差しのべ合い、壁を登る。その壁の上で手を繋ぎ、そこから見える美しい景色を共に眺める。そんな世界になることを、僕は心から願っている。

奨励賞

図書館ノススメ

あま市立美和中学校　３年　美藤　かのん

静かな空間なのに、私の心は弾む。

日本には約三四〇〇ある図書館。

私は図書館が大好きである。四方を様々な種類の本に囲まれた、私の癒しの場。

中学三年生になって、部活動や勉強も忙しくなり、行く回数は減ったが、二週間ごとに母が借りてくるたくさんの本は癒しそのものである。

私が図書館にこだわる理由の一つに、図書館が無料だということがある。無料であるため、購入するのは迷うが少し興味がある本を、なんのためらいもなく借りられる。それが一番好きな本になっていったりするので面白い。その逆もある。面白そうだと思って借りたのに、読んでみたら期待外れだったという経験も少なくない。けれど、それも冒険なので落ち込むことはない。これらは、書店には不可能な図書館ならではの利点である。この利点を活用して、母は実に幅広い分野の本を借りてくる。父の好きなスポーツ・数学分野、弟の好きな生物・工作・自動車分野、母の好きな教育・社会問題分野、私の好きな小説、そして学習の本。表紙がかわいかったという理由だけで借りてくることも多い。我が家の一年間に借りる本をもし購入していたら、軽く一〇〇万円は超えるだろう。なんというぜいたく。図書館は、知的に、経済的に、そして心に豊かさをくれる場所なのだ。他にも図書館の良さはあふれている。皆が静かに読書をしているので、自分も自然と本の世界に入りこむことができる。また、学生には嬉しい学習室が備わっているので、勉強には快適な環境だ。

私が図書館を語る上で欠かせないのが祖父の存在である。祖父は病気で左半身が不自由になり、色々なことが奪われたが、長年の趣味であった読書だけは変わらずに続けることができた。一週間のほとんどを図書館で過ごすほど、本と図書館を愛していた。そのおかげで、私も幼い頃から図書館へ連れて行ってもらっていた。図書館で働いている方々が祖父の手助けをしている姿や、祖父・母・私がそれぞれ違う種類の本を読み満足している姿は、本と図書館に人を幸せにする力があることを表している。祖父は三年前に天国へと旅立った。最後の最後まで私の大好きな本の先生だった。私が図書館を大切にするのは、こうした祖父への想いもあるのかもしれない。

図書館が今、危機に直面している。私もゲームやアニメ、SNSなどの新しいツールを毎日利用しているので、読書離れが進んでいるというニュースをきいても驚かない。また、電子書籍が普及し、紙の本の必要性が低くなってきている。電子書籍のメリットは多い。持ち運びが楽で一台の機器で何冊も読めるという利用者側の利点に加え、売買が楽、印刷コストがかからず、紙やインクを使用しないため地球に優しいという生産者側の利点もある。これは単純に紙書籍の欠点となる。これに加え、図書館には不要論が出るほどの課題がある。本・施設の維持、人件費など様々だ。図書館の存在意義が問われている中で、課題点を理解しても、私は図書館のない生活を受け入れることができない。

図書館は日本が、平等に教育を受けられる社会であることの象徴であると思う。さらに無料で借りられるのは日本が安全で、人々の信頼関係が築かれているという事実があるからだ。これらの素晴らしさは、図書館でしか得られないと私は考える。しかしながら、どんなに図書館の魅力を叫んでも問題が解決するわけではない。そこで、これからの図書館について提案したい。まず、考え方を変え、デジタル化と融合する。例として、希少な資料は完全データ化し、閲覧しやすくする。膨大な蔵書の中から欲しい本をロボットが持って来てくれるなどの案が考えられる。さらに、新たな図書館の在り方として、宿泊できたり、討論会などのイベントを催したり、市民が本を作るのも素敵だ。つまり、図書館側から動き出すことが最重要である。

15才の私はまだ未熟で考えも浅い。しかしあきらめたくない。最近読んだ本の一節「国民に本を読ませない国は滅びる。」とあった。この言葉に衝撃を受けた。まさに、この言葉が私の伝えたいことの中心だ。これからも図書館の重要性と未来について考え続けたい。おじいちゃんの想いものせて。

奨励賞

祭の継承

あま市立甚目寺南中学校　3年

山田和摩

天下の奇祭・国府宮はだか祭を知っているだろうか。はだか祭とは、愛知県稲沢市の国府宮神社で毎年旧暦の正月十三日に行われており、千二百五十年以上の歴史を持つ神事のことだ。神男（儺負人）と呼ばれる人を毎年一人決め、その神男に触れて厄を落とそうと、数千人の下帯・白足袋姿の裸男が神男に群がり、凄まじい揉み合いになるのである。僕は幼少期、稲沢市に住んでおりこの祭に親しんできた。現在は隣のあま市に住んでいるものの、祭の開催日が休みの日は見に行くこともある。そんなはだか祭だが、揉み合いの前に儺追笹奉納というものが行われている。子供や女性らが、願いを布に書いて笹に結び、裸男たちに託すのだ。しかし、今年からこの儺追笹奉納に女性が参加できるようになった。僕はこれを知ったときとても驚いた。なんとなくこの祭は男性だけのものだと思っていて、女性は参加できないものだと思い込んでいたからだ。地元の女性団体から昨年、女性も何か関わりたいと申し入れがあったそうだ。僕は古くから伝わることを大切にした方がいい、そしてそれが当たり前だと思っていたが、このことをきっかけに考えを改めるようになった。伝統を継承するためには、形を変えていくことも必要なのだと。

全国にははだか祭と同じように、今までとは形を変えて斎行される祭がいくつかある。その例として挙げられるのが、上げ馬神事だ。上げ馬神事は三重県の多度大社で斎行される祭である。各地区より出された数頭の馬が、約二メートルの壁を駆け上がり、その年の農作物の作柄を占うものだ。ただ、この祭は以前から動物虐待だと指摘されており、昨年は骨折した馬を殺処分したことが大きく取り上げられたことによって、壁をなくして坂の傾斜を緩やかにするなどの対策が取られることとなった。しかし、このことが原因で例年参加している地区が本来の祭とは違うということで、参加を見合わせていることを耳にした。

また、岩手県の黒岩寺蘇民祭は今年で終わりを告げた。蘇民祭は、蘇民袋と呼ばれる袋を奪い合い、最後に袋を持つ者が五穀豊穣を約束されるといわれる祭である。わずか二百人程度で行われる小さな町での祭が、約十五年前のポスターが卑猥であると言われたことをきっかけに、テレビや新聞などで大きく取り上げられ、毎年注目を浴びるようになった。後継者不足ということで終わりとなったが、千年以上続く歴史に幕を下ろしたことは苦渋の決断だったと思う。もしかすると、マスコミやネット上にこれほど取り上げられることがなければ、この祭は今でも粛々と続けられていたかもしれない。

このように、全国には形を変えてでも存続し続けようとする祭や、時代の変化と共にやむを得ず終わる祭もある。それは致し方ないことではあるが、長い歴史を持つ祭に終止符が打たれることはとても悲しいことだと思う。祭が行われている地域では、祭が近づくと町全体に活気があふれ、楽しげな雰囲気を感じられる。実際にはだか祭が近づくにつれ、稲沢市が祭ムードに覆われると、僕自身もわくわくした気持ちになっていったことを今でも覚えている。祭はそこに住む地域の人々にとって生活の一部であり、活力の源になるかけがえのないものであると思う。しかし、その祭の由来・歴史を知らない人が、マスコミやネット上の一部分だけを切り取って見て簡単に批判したりしているのが、現在の日本の現状ではないかと僕は思う。伝統を継承していくため、時には形を変えていくことも仕方がないかもしれない。しかし、別の見方をすれば、時代の変化に合わせて伝統を守っていくのは僕たちではないだろうか。祭をどうすれば存続することができるのだろうかということを大前提に考えなければ、地域の伝統が失われていってしまう。

僕は国府宮はだか祭、そして日本の祭が大好きだ。それらの伝統が未来へ継承されていくことを心から願う。

奨励賞

幸せを届けるために

豊田市立小原中学校　３年　横目芽里奈

「うるさい。黙って。」

「ねえ、何してんの。」

「話しかけてくんな。」

つい言ってしまっていた。一緒に住んでいるおじいちゃんに。

私の家には、認知症のおじいちゃんがいる。小学六年生の冬の頃、夕飯の時におじいちゃんがふと、

「今年最後のごはんだな。」

と言った。意味が分からず、家族は困り果てた。今年で最後？今は年末どころか、新年を迎えたばかりだ。おじいちゃんの言っていることが分からなかった。その日から、日に日におじいちゃんは意味の分からないことを言うようになった。私たち家族は、おじいちゃんとうまく会話ができなくなった。

心配になったおばあちゃんがおじいちゃんを病院に連れていった。結果は、認知症。私がまず思ったことは「めんどくさいな。」だった。話の通じないおじいちゃんの、食事や排せつの世話。面倒で、うっとうしいと思った。私は、おじいちゃんに嫌悪感を抱くようになった。

おじいちゃんの病名が分かった翌日から、私はおじいちゃんへ酷い言葉をぶつけるようになった。おじいちゃんの言葉や行動の一つ一つが気に障った。交代でおじいちゃんの世話をする家族の姿を見て、おじいちゃんがこの家からいなくなってくれたら。そう思ってしまうこともあった。自分が自分でなくなってしまったようで、怖かった。

ある日、本棚から認知症について書かれた本を見つけた。その本にはこう書かれていた。

「認知症の人は、心配症なんです。」

認知症にかかったら感情をもつことができなくなると思っていた。けれど、認知症の人にも感情があること、しかもそれは不安な気持ちの表れであるということを知った。どうして私は、認知症の人に感情はないと決めつけ、暴言を吐いてしまったんだろう。もうあんなことはしない。私は、反省の気持ちを行動に移すことにした。

朝、私から「おはよう。」と声をかけてみた。するとおじいちゃんは笑顔で「おはよう。」と返してくれた。酷いことをした私に。後日、リビングとトイレを間違えたおじいちゃんをトイレへ案内した。「トイレはこっちだよ。」と言うと、すぐに理解してくれた。私の言葉を聞き入れてくれたのはおじいちゃんの優しさだと、素直に感じられた自分がいた。

おじいちゃんとの関わりの中で気がついたことがある。それは、偏見は自分や周りを苦しめるということだ。悪いところに目を向けて「こうに違いない。」と決めつけてしまえば、誰でも簡単に不幸になる。だからまずは、どんな物事にも良い面があると信じて探してみる。それはきっと周りを笑顔にして、小さな幸せに繋がるだろう。私はそんな幸せを周りに届けたい。

中学三年生になり、勉強や部活動に追われるようになった。全て投げ出してしまいたいと思うときもある。だけど、そんな中でも決して心を失わず、誰に対しても思いやりをもって接していこうと心を新たにした。もう、あんな過ちを犯さない。今日も私は笑顔で声をかける。

「おじいちゃん、こっちだよ。」

令和６年度少年の主張愛知県大会

講　評

審査委員長（中日新聞本社編集局次長兼社会部長）
青　柳　知　敏

少年の主張愛知県大会に出場した14人の皆さんの発表は、どれも本当に素晴らしい発表でした。14人の皆さんが、それぞれの体験、身の回りで起きていること、自分自身が感じていること、世の中に対して思うことなど、中学生としての生活の中で手の届くところから広げた世界を主張し、その思いがとても伝わってきました。14人それぞれの主張は、審査委員だけでなく、会場にいらっしゃった皆さんにしっかりと伝わったと思います。

中でも、最優秀賞を受賞された村木さんの主張は、オセロのように変わった家族の暮らし、お弁当を作ってくれるお父さんへの思いが真っすぐに伝わってきました。今回の受賞はお父さんも天国にいらっしゃるお母さんもとても喜んでいると思います。

審査委員として14人の皆さんの原稿を事前に拝見し、主張のポイントやどのようにまとめているかなどを、新聞社勤務の視点から審査しましたが、どの原稿も甲乙がつけがたい内容でした。さらに、大会で14人の発表を聞いて強く感じたことがありました。それは、文章に声や話し方、表情やジェスチャーが加わることで、表現や伝える力、言葉が持つ力が何倍も大きくなるということです。

会場では14人の発表者がそれぞれの思いを主張するとともに、自分とは異なる考え方や異なる立場の方の主張にも耳を傾けていましたが、これはとても大事なことだと感じました。この大会が14人の発表者を始め、35,000人を超える応募された皆さんが、自分とは異なる方の主張を聞き、考え、話しながらお互いに理解し合う、そのきっかけになる大会になったと思います。少年の主張愛知県大会に参加された中学生の皆さんが、これから色々な体験をし、失敗したり喜んだりしながら人生を豊かにしていく、そのきっかけになればいいなと思います。

募集及び審査の経過と結果

1　募集の経過

令和６年４月から６月までの期間、公立中学校、義務教育学校及び特別支援学校中学部については、県教育委員会（県教育事務所経由）と名古屋市教育委員会を通じて、国立・私立中学校及び各種学校等については県から応募を呼びかけた。

2　募集の状況

応募者は、247校から35,312名であった。（管内別の応募状況は、「４　審査の結果及び表彰」のブロック審査の表を参照のこと）。

3　審査の経過

学校選考、地区ブロック審査により選考された14名が、県大会において発表を行い、審査を受けた。ブロック審査日程、審査基準及び県大会審査委員は次のとおりである。また、これとは別に、地元の中学生が最も共感を覚えた作品を選定する「共感賞」を設定した。

○　審査日程

ブロック審査

⑴ 尾張・名古屋地区　令和６年６月27日（木）　愛知県三の丸庁舎
⑵ 西三河地区　令和６年７月 ２日（火）　愛知県西三河総合庁舎
⑶ 東三河地区　令和６年６月26日（水）　愛知県東三河総合庁舎

県　大　会

令和６年８月23日（金）　午後０時30分～午後３時50分
新城地域文化広場

○　審査基準（ブロック審査は論旨のみ）

⑴ 論旨規準
ア　鋭い感性で、新鮮な主張であるか。（中学生らしさ）
イ　新しい情報や視点があるか。
ウ　個人の体験にとどまらず、一般性、社会性があるか。
エ　提案や提言を実現、実践する意欲が感じられるか。
オ　論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

⑵ 論調・態度
ア　話しぶりに熱意と迫力があるか。
イ　聴衆をよく見て落ち着いて話したか。
ウ　説得力のある話し方で、聴衆に感銘を与えたか。

○　審査委員（県大会）　７名（◎印は審査委員長）

◎青　柳　知　敏（中日新聞本社編集局次長兼社会部長）
上　泉　美　雄（NHK名古屋放送局　コンテンツセンター　副部長）
立　川　恵　理（愛知県小中学校長会　豊川市立代田中学校長）
安　形　　博（新城市教育委員会教育長）
後　藤　義　広（愛知県教育委員会教育部義務教育課主査）
中　西　真　希（愛知県県民文化局県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室長）
成　瀬　眞佐子（愛知県青少年育成県民会議副会長）

○　共感賞

新城市の中学校代表者５名が「『共感！』ジュニア選考委員会」の委員として選考にあたった。進行を担当するサポートスタッフを、新城市教育委員会にお願いした。

〔「共感！」ジュニア選考委員会〕

片　桐　瑠　優（新城中学校）　　梅　村　幸　和（千郷中学校）

瀧　川　凌　矢（東郷中学校）　　中　村　龍　飛（八名中学校）

菅　沼　希　望（鳳来中学校）

4　審査の結果及び表彰

○　ブロック審査（作文審査）

ブロック別	区分／管内別	応募者数（人）	参加校数（校）	各審査での選考数（人）		
				学校審査	地区審査	ブロック審査
尾張・名古屋	名古屋市	192※	14	13	6	5
	尾張	7,253	67	67	14	
	海部	2,558	22	22	8	
	知多	1,940	28	28	8	
西三河		20,404	86	86	19	5
東三河	新城	219	5	5	3	4
	設楽	44	3	3		
	東三河	2,702	22	22	11	
計		35,312	247	246	69	14

※個人応募を含む

○　県大会（意見発表審査）

種　　別	氏　　名	題　　名	学校名・学年
最優秀賞 (愛知県知事賞)	村木　新（むらき　あらた）	「じゃない方」になって気づいたこと	西尾市立鶴城中学校（にしおしりつつるしろ） ３年
優秀賞 (愛知県議会議長賞)	神谷　瑠音（かみや　るおん）	こどもまんなかの社会へ	岡崎市立六ツ美中学校（おかざきしりつむつみ） ３年
優秀賞 (新城市長賞)	安藤　咲希（あんどう　さき）	戦争のない世界へ	稲沢市立大里東中学校（いなざわしりつおおさとひがし） ３年
優秀賞 (愛知県教育委員会賞)	牧野　一貴（まきの　かずき）	知ってほしい私の世界、私の思い	新城市立千郷中学校（しんしろしりつちさと） ３年
優秀賞 (愛知県青少年育成県民会議会長賞)	落合　奏重（おちあい　そえ）	「二つの小さな命と出会って」	一宮市立北部中学校（いちのみやしりつほくぶ） ３年
奨励賞	安藤　さくら（あんどう）	笑顔溢れる海を目ざして	田原市立田原中学校（たはらしりつたはら） ３年
奨励賞	飯島　ディスミ（いいじま）	難しくて奥深い	豊川市立中部中学校（とよかわしりつちゅうぶ） ３年
奨励賞	木村　茅咲（きむら　ちさ）	自分らしさ	碧南市立新川中学校（へきなんしりつしんかわ） ３年
奨励賞	黒田　空蒼（くろだ　そら）	ふるさとの魅力、発掘	西尾市立佐久島しおさい学校（にしおしりつさくしま） ３年
奨励賞	竹内　結希（たけうち　ゆうき）	究極の二択？	新城市立八名中学校（しんしろしりつやな） ２年
奨励賞	戸谷　桜大（とや　おうだい）	あの壁の向こうには	あま市立七宝北中学校（しりつしっぽうきた） ３年
奨励賞	美藤　かのん（びとう）	図書館ノススメ	あま市立美和中学校（しりつみわ） ３年
奨励賞	山田　和摩（やまだ　かずま）	祭の継承	あま市立甚目寺南中学校（しりつじもくじみなみ） ３年
奨励賞	横目　芽里奈（よこめ　めりな）	幸せを届けるために	豊田市立小原中学校（とよたしりつおばら） ３年

◎ 発表者全員に、「奨励賞」(愛知県青少年育成県民会議会長賞)が贈られました。

共感賞	安藤　咲希（あんどう　さき）	戦争のない世界へ	稲沢市立大里東中学校（いなざわしりつおおさとひがし） ３年

＊「共感賞」は、開催地新城市の中学生の中から選ばれた５名が選考委員となり、最も共感できる作品を選出しました。

＊学校推薦者246名のうち、本大会発表者以外の232名については、愛知県青少年育成県民会議から努力賞が贈られました。

○　表　彰

県大会発表終了後、発表者に対し、前表の審査結果のとおり賞が贈られた。

また、学校代表となったが、大会発表とはならなかった次表の232名に対し、愛知県青少年育成県民会議会長から努力賞が授与された。

努力賞（232名）

氏　名	学　校　名	学年
岩　田　　譲	名古屋市立笈瀬中学校	3
川　原　　周	名古屋市立あずま中学校	1
桐　井　　文	名古屋市立名塚中学校	2
山　本　　風	名古屋市立振甫中学校	1
安　井　　凛	名古屋市立桜丘中学校	2
安　井　灯　色	名古屋市立矢田中学校	2
池　　エリナ	名古屋市立山王中学校	3
猪　飼　桜　来	名古屋市立新郊中学校	3
宍　倉　舞　佳	名古屋市立守山東中学校	1
山　岸　雛　菊	名古屋市立平針中学校	3
加　畑　圭　亮	名古屋市立大森中学校	3
紺　野　友　奈	名古屋市立前津中学校	2
犬　飼　小　夏	名古屋市立当知中学校	3
斎　藤　百　音	一宮市立南部中学校	2
土　屋　奈　央	一宮市立千秋中学校	2
髙　木　菜　月	一宮市立尾西第三中学校	3
後　藤　愛　美	稲沢市立稲沢中学校	3
伊　藤　結　月	稲沢市立明治中学校	3
坂　中　桜　彩	稲沢市立千代田中学校	3
持　田　悠　衣	稲沢市立大里中学校	3
荻　原　沙　妃	稲沢市立治郎丸中学校	3
久　松　萌乃華	稲沢市立稲沢西中学校	3
近　藤　南　穂	稲沢市立平和中学校	3
栗　田　珠　朱	犬山市立城東中学校	3
﨑　田　はるひ	犬山市立南部中学校	3
柴　川　汰　希	犬山市立東部中学校	3
小　池　享　芽	江南市立古知野中学校	2
冨　田　　麗	江南市立西部中学校	2
瀬　戸　　遥	大口町立大口中学校	2
田　坂　峻　一	扶桑町立扶桑中学校	3
亀　井　　遙	扶桑町立扶桑北中学校	3
河　村　蒼　大	瀬戸市立水無瀬中学校	3
折　川　優　衣	瀬戸市立南山中学校	3
伊　藤　優　衣	瀬戸市立幡山中学校	3
ウエチ　サクラ	瀬戸市立光陵中学校	3
徳　井　絢　香	瀬戸市立水野中学校	3
加　藤　海　春	瀬戸市立にじの丘中学校	3
中　西　史　和	春日井市立東部中学校	3
山　口　心　桜	春日井市立西部中学校	3
伊　藤　愛　深	春日井市立坂下中学校	3

氏　名	学　校　名	学年
松　尾　侑里乃	春日井市立知多中学校	3
中　瀬　杏　梨	春日井市立鷹来中学校	3
仲　尾　朋　香	春日井市立南城中学校	3
小　島　羽　純	春日井市立石尾台中学校	3
水　野　葉　月	小牧市立小牧中学校	3
鈴　木　奈　生	小牧市立味岡中学校	3
礒　野　　百	小牧市立篠岡中学校	3
吉　田　琴　葉	小牧市立北里中学校	3
高　田　眞　佑	小牧市立応時中学校	3
奥　田　水　葵	小牧市立岩崎中学校	3
宮　島　沙　奈	小牧市立桃陵中学校	3
社　本　沙　良	小牧市立小牧西中学校	3
今　泉　友　希	小牧市立光ヶ丘中学校	2
水　木　陽　菜	尾張旭市立旭中学校	3
名　原　　潤	尾張旭市立東中学校	3
田　中　　杏	尾張旭市立西中学校	3
中　村　秋　香	豊明市立豊明中学校	3
後　藤　恵　茉	豊明市立栄中学校	3
屋　形　崚　翔	豊明市立沓掛中学校	3
岡　　実　莉	日進市立日進中学校	3
刑　部　杏　海	日進市立日進北中学校	3
野　口　あんり	日進市立日進東中学校	3
石　川　花　梨	清須市立西枇杷島中学校	3
松　村　深　白	清須市立清洲中学校	3
川　上　　司	清須市立新川中学校	3
松　村　心　萌	清須市立春日中学校	3
東　井　　咲	北名古屋市立師勝中学校	3
貴　嶋　　桜	北名古屋市立西春中学校	3
大　石　夏　由	北名古屋市立白木中学校	3
玉　利　こと葉	北名古屋市立訓原中学校	3
濱　垣　いろは	北名古屋市立熊野中学校	3
渡　邉　　結	北名古屋市立天神中学校	3
高　橋　奈　那	長久手市立長久手中学校	3
川　本　杏　奈	長久手市立北中学校	2
鈴　木　春　風	東郷町立東郷中学校	3
山　本　理　暉	東郷町立春木中学校	3
鈴　木　友　徠	東郷町立諸輪中学校	3
上　仮　屋　陸	豊山町立豊山中学校	3
勝　　花　音	津島市立天王中学校	3
梅　﨑　開　成	津島市立藤浪中学校	3

氏　名	学　校　名	学年
千　田　紗　羽	津島市立神守中学校	3
藤　谷　若　葉	津島市立暁中学校	2
河　納　　凛	愛西市立永和中学校	3
後　藤　春　哉	愛西市立佐屋中学校	3
橋　本　穂　月	愛西市立立田中学校	3
棚　橋　康　晴	愛西市立八開中学校	3
佐　竹　由　愛	愛西市立佐織中学校	3
村　瀬　詩　波	愛西市立佐織西中学校	3
加　古　唯　菜	弥富市立弥富中学校	3
近　藤　成　純	弥富市立弥富北中学校	3
山　田　茉　那	弥富市立十四山中学校	3
佐　藤　玲　香	あま市立七宝中学校	3
中　島　　凛	あま市立甚目寺中学校	3
那　須　穂　香	大治町立大治中学校	3
山　田　希　実	蟹江町立蟹江中学校	3
近　藤　妃　彩	蟹江町立蟹江北中学校	3
杉　浦　涼　太	飛島村立飛島学園(小中一貫校)	9
桒　名　結　衣	半田市立半田中学校	3
福　岡　す　ず	半田市立乙川中学校	3
富　田　雄　大	半田市立亀崎中学校	3
榊　原　菜々香	半田市立青山中学校	3
平　松　和　瑚	常滑市立青海中学校	3
皆　川　美　琴	東海市立名和中学校	3
佐　藤　一　真	東海市立上野中学校	3
蟹　江　あかり	東海市立平洲中学校	3
北　川　愛美花	東海市立横須賀中学校	3
井　上　遼　真	東海市立加木屋中学校	3
清　水　さや佳	大府市立大府中学校	3
岸　虎　之　介	大府市立大府西中学校	3
深　川　晴　香	大府市立大府北中学校	3
橋　本　音　葉	大府市立大府南中学校	3
林　　夏　希	知多市立八幡中学校	3
篠　田　　蒼	知多市立知多中学校	3
新　美　一　護	知多市立旭南中学校	3
堀　田　芽　李	知多市立東部中学校	3
長　谷　柚　奈	阿久比町立阿久比中学校	3
青　木　千　春	東浦町立東浦中学校	2
榊　原　万　智	東浦町立北部中学校	3
綾　野　　杏	東浦町立西部中学校	3
板　垣　朱　莉	南知多町立南知多中学校	3
石　橋　柚　葉	南知多町立篠島中学校	3
森　田　　樹	美浜町立河和中学校	3
夏　目　祐　綺	美浜町立野間中学校	3
榊　原　瑚々実	武豊町立武豊中学校	3
野　畑　唯　果	武豊町立富貴中学校	3
巣　山　茉　子	岡崎市立甲山中学校	3
太　田　壮　亮	岡崎市立美川中学校	3

氏　名	学　校　名	学年
坂　本　詩　桜	岡崎市立南中学校	3
宮　入　明　莉	岡崎市立竜海中学校	3
加　藤　桜　子	岡崎市立葵中学校	3
安　藤　優　衣	岡崎市立城北中学校	1
丹　波　柚　椛	岡崎市立福岡中学校	3
鈴　木　ましろ	岡崎市立東海中学校	3
花　池　結　衣	岡崎市立河合中学校	3
小　原　奈　央	岡崎市立常磐中学校	3
黒　柳　大　華	岡崎市立岩津中学校	3
横　山　　葵	岡崎市立矢作中学校	3
古　川　欧　瑛	岡崎市立矢作北中学校	3
秋　田　琉　莉	岡崎市立新香山中学校	3
志　賀　　紬	岡崎市立竜南中学校	3
小　森　愛　心	岡崎市立北中学校	3
伊　奈　毬　那	岡崎市立六ツ美北中学校	3
浅　井　優太朗	岡崎市立額田中学校	3
森　田　茉　優	岡崎市立翔南中学校	3
佐々木　虎太郎	碧南市立中央中学校	3
榊　原　茉　実	碧南市立南中学校	3
名　倉　実　里	碧南市立東中学校	3
神　谷　美　波	碧南市立西端中学校	3
児　玉　絢　菜	刈谷市立刈谷南中学校	3
鈴　木　彩　永	刈谷市立雁が音中学校	3
江　森　安　優	刈谷市立依佐美中学校	3
松　井　季　朋	豊田市立崇化館中学校	3
森　　琉　晟	豊田市立朝日丘中学校	3
榎　本　絢　羽	豊田市立豊南中学校	3
岩　附　咲　花	豊田市立高橋中学校	3
倉　橋　杷　七	豊田市立上郷中学校	3
小　林　　碧	豊田市立高岡中学校	3
長　谷　優　希	豊田市立保見中学校	3
青　山　友梨香	豊田市立猿投中学校	3
黒　岩　万奈葉	豊田市立猿投台中学校	3
竹　葉　允　哉	豊田市立石野中学校	3
深　津　　奏	豊田市立松平中学校	3
外　園　こ　彩	豊田市立竜神中学校	3
藤　田　優　海	豊田市立美里中学校	3
荒　井　綾　乃	豊田市立逢妻中学校	3
神　谷　奈　那	豊田市立若園中学校	3
岡　部　璃　桜	豊田市立梅坪台中学校	3
中　西　隆　登	豊田市立前林中学校	3
土　岐　彩　乃	豊田市立益富中学校	3
長　坂　真　帆	豊田市立末野原中学校	3
加　藤　浩　基	豊田市立井郷中学校	3
梅　村　音　巴	豊田市立藤岡中学校	3
菅　崎　海　音	豊田市立足助中学校	3
和　出　明咲実	豊田市立下山中学校	3

氏　名	学　校　名	学年
鈴　木　満手知	豊田市立旭中学校	3
池　嶋　美　海	豊田市立稲武中学校	3
二　宮　ゆ　い	豊田市立藤岡南中学校	3
金　原　琉　仁	豊田市立浄水中学校	3
田　中　　翔	安城市立安城南中学校	3
杉　浦　唯　心	安城市立明祥中学校	3
田　中　爽　楽	安城市立安城西中学校	3
神　谷　澄　人	安城市立桜井中学校	3
浅　井　麻　央	安城市立東山中学校	3
古　川　りのん	安城市立安祥中学校	3
石　川　琴　梨	安城市立篠目中学校	3
中　村　百々羽	西尾市立西尾中学校	3
稲　垣　美優華	西尾市立平坂中学校	3
藤　村　紗　衣	西尾市立寺津中学校	3
鈴　木　穂　香	西尾市立福地中学校	3
牧　野　ひよ梨	西尾市立東部中学校	3
村　松　優　妃	西尾市立一色中学校	3
左右田　弥　虹	西尾市立吉良中学校	3
山　本　達　也	西尾市立幡豆中学校	3
伊　藤　百々果	知立市立知立中学校	3
鈴　木　亜由莉	知立市立竜北中学校	3
ﾊﾞﾝﾀﾞﾗﾅﾔｶﾘﾕﾐ	知立市立知立南中学校	3
千　賀　小　路	高浜市立高浜中学校	3
柴　田　礼　実	高浜市立南中学校	3
石　川　さくら	みよし市立三好中学校	2
安　藤　和　子	みよし市立北中学校	3
當　間　玲　奈	みよし市立南中学校	3
佐　藤　明日香	みよし市立三好丘中学校	3
小　林　千　桜	幸田町立幸田中学校	3
宮　脇　由紀恵	幸田町立南部中学校	3
野　村　咲　月	幸田町立北部中学校	3
侍　　静　怡	愛知教育大学附属岡崎中学校	3
平　安　小　町	豊橋市立羽田中学校	3
片　山　ま　こ	豊川市立東部中学校	3
袴　田　莉　央	豊川市立南部中学校	3
比　嘉　沙　來	豊川市立西部中学校	3
佐久間　加　恋	豊川市立代田中学校	3
渡　邉　由　奈	豊川市立金屋中学校	3
今　井　二　胡	豊川市立一宮中学校	3
渡　辺　結　那	豊川市立音羽中学校	3
久保田　伊　玖	豊川市立御津中学校	3
杉　浦　　先	豊川市立小坂井中学校	3
山　口　彩　佳	蒲郡市立蒲郡中学校	3
鈴　木　礼　音	蒲郡市立三谷中学校	3
河　嶋　亜　弥	蒲郡市立塩津中学校	3
杉　浦　愛　奈	蒲郡市立大塚中学校	3
鈴　木　結　弓	蒲郡市立形原中学校	3

氏　名	学　校　名	学年
飯　島　希　海	蒲郡市立西浦中学校	3
鈴　木　真　緒	蒲郡市立中部中学校	3
鈴　木　愛　央	田原市立東部中学校	3
丸　山　百　椛	田原市立赤羽根中学校	3
荒　木　理　世	田原市立福江中学校	3
村　田　梨　緒	新城市立新城中学校	3
鈴　木　芽　依	新城市立鳳来中学校	3
齊　藤　日向子	新城市立作手中学校	3
金　田　真　実	設楽町立設楽中学校	3
和　合　優　衣	東栄町立東栄中学校	3
片　桐　悠李夢	豊根村立豊根中学校	3

〈 参　考 〉

「第46回少年の主張全国大会～わたしの主張 2024～」
内閣総理大臣賞受賞作品

「一隅を照らす」

（宮城県）　栗原市立栗原南中学校　３年

ケイバージーバ

「一隅を照らす」という言葉を知っていますか？この言葉は、パキスタンとアフガニスタンで三十五年もの間、病気の人達や貧しい人達のために医療や開拓などの支援活動を行ってきた医師、中村哲さんが好んで使っていた言葉です。

私が中村哲さんのことを知ったのは、小学四年生の頃。「日本人でそんな人がいるなんて……。」「とても勇気のある人だ。」と強い感銘を受けました。

「私も中村さんのようになりたい……。」

「困っている人達を救いたい。」

自分には今、何ができるのか、自分はどう生きていくのかを考えることが多くなりました。

私は、アフガニスタン人です。パキスタンの小学校に入学しましたが、父の仕事の関係で、四年生からは、日本で生活しています。

六年前に日本に来たときは、家族みんな日本語が全く話せず、言葉の違いや文化の違いに戸惑いました。

パキスタンの学校では、よく分かっていた勉強が、日本の小学校では、全然ついていくことができず……「日本語が分からないから仕方がないか。」と思う自分と「悔しい。何とか分かるようになりたい。」と思っている自分がいました。

日本語が少し分かるようになり、日本の文化にも慣れてきた頃、始まった中学校生活。

待っていたのは、辛い日々……。テストのためにどれだけ勉強しても分からないことだらけで、負けず嫌いな私は、仲のいい友達にも負けたくなかったので、ストレスが重なり、「もう嫌だ。死んでしまいたい……。」

そう思うことが何度もありました。どうしようもなくて泣いたこともあります。

そんな絶望的だった私を助けてくれたのは、友達や先生方でした。周りの人たちが話を聞いてくれたり、おもしろいことを言って笑わせてくれたりして救ってくれました。両親も、いつも応援してくれました。

「私も周りの人を助けてあげられる存在になりたい。」そう思うようになりました。

アフガニスタンには、病院も水もない場所があります。そこで中村さんは、「一隅を照らす」「自分が今いる場所で、自分にできることを一生懸命やる」といった精神で、医師として、人として多くの苦しむ人達を助けてきたのです。

私の将来の夢は、医師です。現在のアフガニスタンでは、女性が学校に通えるのは小学校までで、女性が教育を受け、就職する機会が奪われています。私の親戚も女性は働いていません。私の母は「自分は勉強できなかったから、ジーバにはさせたい。」と、いつも励ましてくれます。アフガニスタンに住む友達は、「平和な国で学校に行けて、勉強できていいね。」と言って毎日泣いています。

日本に来て、辛かったこともありましたが、今は、日本で勉強ができていることが本当に幸せです。日本の国籍を取得し、大学に入って自分の夢を実現させたいと思っています。

家族と話すパシュート語、ウルドゥ語、ヒンディー語、アラビア語、英語、日本語。私が話せる言語です。それを自分の特技として生かしていきたいです。医師になって、母国のアフガニスタンで病気の人達や貧しい人達を助けてあげたいです。私が働くことが、アフガニスタンの女性達の希望につながる。そう信じています。

人間は一人では生きていけません。人から支えてもらい、人を支えて生きています。私を支えてくれた友達や先生、そして両親に恩返しをするために、「一隅を照らす」パシュート語で(یو کونج روښانه کړئ)。まずは、今の自分にできることを、やり続け、やり遂げられる人になりたいです。いつか、日本とアフガニスタンを結ぶ架け橋になるために。

青少年育成県民運動

４つの青少年育成県民運動

●青少年の非行・被害防止に取り組む県民運動
－７月１日～８月31日
12月20日～１月10日
スローガン▶　～非行の芽 はやめにつもう みな我が子～

●青少年によい本をすすめる県民運動－10月１日～10月31日
スローガン▶　～育てよう 豊かな心 読書から～

●子ども・若者育成支援県民運動－11月１日～11月30日
スローガン▶　～はぐくもう 自分らしく生きる子 愛知の子～

●「家庭の日」県民運動－２月１日～２月28日
スローガン▶　～親と子の 対話がつくる よい家庭～

令和６年度少年の主張愛知県大会
発　表　文　集

編集・発行　愛知県県民文化局県民生活部社会活動推進課
（https://www.pref.aichi.jp/soshiki/syakaikatsudo/）
愛知県青少年育成県民会議
（https://www.pref.aichi.jp/site/syakaikatsudo-kenminkaigi/）
〒460-8501　名古屋市中区三の丸三丁目１番２号
電話(052)954－6175（ダイヤルイン）

（注）転載の際は、上記へご連絡ください。

（家庭の日のシンボルマーク）

毎月第3日曜日は
家庭の日

愛知県青少年育成推進キャラクター
「ゆうりぃ」

“ 親と子の　対話がつくる　よい家庭 ”

— 明るく楽しい家庭づくりを —